

弥生 愛南文芸

さわらび短歌会

支へられ生きる幸せ先ず記す

三年日記の三年目の初春

おでん炊く鍋に時折目を留めつつ

さわらび歌誌をホツキスに綴づ

振り返り成しえぬことの多けれど

気づけば遅き齢となりけり

寄せ植えの鉢をあふれて咲く花の

濃きも淡きも春を呼ぶ色

西向きの部屋に朝日が反射して

薄き影なす小雪すぎて

大年に拍子木の音響ききて

リハビリに励む夫思っている

前田 充

松本マズ子

藤井 擴

岩村千代子

水野美代子

河上 明美

亡き夫の友より届きしラ・フランス

声を掛けつつお供えをする

我が郷の空も広場も占拠して

帰省の孫と凧上げ競う

若き日には太くて嘆きし吾の髪

入念に梳きて会へ出で行く

叩かれてなお命持つ冬のハエ

畳の上に羽音は止まず

生田八寿子

澤近 正弘

前田 知子

門屋あけみ

菊川俳句会

早春の風が廃校撫でてゆく

春眠や空棘魚の鈍き鰭

春の雨紫色の鉄アレイ

伊予灘に恋す菜の花笑う風

脚を立てレンズの中の春を撮る

春を摘み山菜おこわ母の味

母憂う少雨の梅の蕾かな

春の星都会の無音さんざめく

中川 一喜

浅野勇一郎

迦恋

安岡留美子

河野 孝

河野 清美

和田 靖樹

福田 りさ